

特集
まえがき

特集 エネルギー自立社会構築に向けて 大学はいかに地域のモデルになり得るか

佐藤高晴

持続可能な社会を構築していくために、大学には、研究によって貢献するとともに、大学キャンパスが地域のエネルギー自立のモデルになることが求められている。再生可能エネルギーや省エネなどの研究が盛んな一部の大学では、予算が投入され、進んだ設備が導入されている。しかし、多くの大学にはこの分野の研究者もおらず、大学執行部の関心も高くないと思われる。

そのような多くの大学でも、空調温度管理の徹底など、主に努力や我慢による対応は求められるだろう。その結果、必要とされる大幅な削減は期待できないにも関わらず、構成員の疲弊やマンネリ化は見られると思われる。

学生たちによる、大学から気候変動を止めるためのNPO法人エコ・リーグの活動や、特定非営利法人気候ネットワークによる京都の大学を中心とした温暖化対策先進事例集の編纂¹⁾、大学での省エネの取り組みに関する日本環境学会東広島大会シンポジウムなど、大学の省エネ・温暖化対策を調べ、その先進事例を普及する試みは行われている。しかし、それらの情報を必要としている現場に行き渡っているというにはほど遠く、また、他にも多くの先進事例がある。

本特集では、前述の環境学会シンポジウムと気候ネットワークの事例集の両方に関わった産業技術総合研究所の歌川学氏に協力をいただき、この分野の専門家がいらない多くの大学でも、研究者・院生・学生は、自分の大学の状態を知り、大学の営繕技術者、経営に関わる理事が、改善の道筋を知り、大学の省エネを進める助けになるようにと、今回の企画を考えた。

特集では、平田仁子氏に、大学で省エネすることの意義と長期目標を提示していただいた。次に、大学での省エネ技術という面から、建築分野について吉田友紀子氏に、大阪大学会館での各種対策による53%もの電力使用量削減の取り組みを、また、主に照明・空調に関わる分野について近本智行氏に、大学のエネルギー消費の特徴を分析し、先進事例を紹介していただいた。大学の省エネを考えるうえで不可欠な実験系での省エネ技術について大岡忠紀・橋本訓氏に報告していただいた。

所属する大学の省エネを考えるさいには、同種の大学の中での、所属大学の省エネ進展度合いの位置を把握し、効果的な省エネを行う必要がある。田浦健朗氏・山本元氏には、京都の大学における省エネの取り組みの分析結果を報告していただいた。服部拓也氏には、エコ大学ランキングなどの活動について、学生の貴重な取り組みということで執筆をお願いした。

また、大学病院の省エネにも通じる社会福祉施設の大幅な省エネ事例について、佐々木剛氏に〈サロン〉で報告していただいた。

ある一つの大学における学生の省エネ意識調査や具体的な活動について、教員の側からの報告を鮎川ゆりか氏にお願いした。

引用文献

- 1) 『大学の省エネ・温暖化対策先進事例集』（特定非営利活動法人気候ネットワーク、2015年2月）。

（さとう・たかはる：広島支部、環境学）